

たんぽのかエルと猿

たんぽのかえるとさる



作：近藤せいけん

あるのどかな屋下がりの田んぼでのことでした。

カエルがのんびり昼寝をしているとき、一匹きの猿がちかづいてきました。

「お〜い カエル、おまえはそんな狭い田んぼの中でたいくつではないか」

「毎日、同じ場所がよく飽きないなあ〜」

「広い世界に行きたいと思わぬのか」

カエルは薄目をあけて、猿を見て「ぐあ〜く、く」とないてから猿に答えた。

「なに、田んぼの中も、悪くないよ。のんびり日なたぼっこができるし、エサも沢山あるし」

「へー、そうかな？ここから先の山すそにはキレイな花ばながあるし、とっても大きな湖があるよ。キレイなちょうちよが沢山いるし、いろんな虫もいるよ。見たいとおもわないかい？」

「そうね、見たいと思うが、そこにいくまでが難儀（なんぎ）だ。あまり苦労したくないし、じっと、しているのが好きなんだ」

「へ〜カエルて変わっているんだねえ〜」

「これがふつうさ」

「そうかい……。おれは、朝、山から降りてきて、さっきまで、川で遊び、今は田んぼで、湧き水を飲み、一日中、自由さ。どこへでも、いけるし」

「そう、いいねえ〜」

「それだけかい？」

猿は不思議そうにカエルを見た。

「ぼくも自由さ」

「おまえが、かい？」

カエルが遙か遠くを見つめた。

「ぼくは、あすこの、大きな雲に乗れるんだ」

「え、え〜本当か？」

猿はまじまじとカエルを見つめた。

「そういうなら、雲に乗って見せてくれ」

「ああ〜いいよ」

「雲がこちらに来るまで、少し待って」

カエルは大きな雲がこちらに来るのをじっと待った。

猿も田んぼの淵に座ってカエルを見ていた。

やがて雲が田んぼの上にやって来た。

田んぼの静かな水面に大きな雲が写った。

カエルがぴよんとはね、田んぼの雲の中に入った。

見事にカエルが雲に乗った。

「どうじゃ、雲に乗っただろう」

猿はあきれて見ていたが。

「わはは、これは面白い。おぬしは知恵者じゃ。わっはは」

「どおれ、わしも、お山へ帰ろうか。さらばじゃ」

五月のそよ風が田んぼの中を吹きぬけていった。

(終わり)